

## 宇都市文化振興まちづくり審議会 第2回会議概要

日時：平成26年(2014年)11月19日(水) 15:00～16:50

場所：新川ふれあいセンター

出席者：委員8人(欠席者2人)

事務局：総合政策部部長、総合政策部次長、  
文化・スポーツ振興課長、文化・スポーツ振興課長補佐、  
文化振興係長、係員1人

その他：報道機関1人、傍聴者0人

### 1 議事

#### (1) 「煌くまち 文化振興ビジョン」の修正について

(会長) 第四次宇都市総合計画・中期実行計画の策定に伴って、文化振興ビジョンの関連部分について、変更・修正を行ったとのことだが、個々の内容について、事務局より説明をお願いします。

≪事務局から、資料の修正事業に関する新旧対象表及び修正後の「煌くまち 文化振興ビジョン(抜粋)」に基づき説明を行った≫

(会長) 質問や意見はないか。

(委員) 「UBEビエンナーレ世界一達成市民委員会」とは、どういう組織でどういう位置付けの団体か。

(事務局) 広く市民や文化団体に呼び掛けて、UBEビエンナーレの今後のあり方について、一緒に考えていこうということで平成24年10月に設立された。UBEビエンナーレを盛り上げるために、平成25年度は彫刻と華道のコラボや、ダンサーが彫刻作品を鑑賞してのダンスパフォーマンスの外、市民がビエンナーレに関するグッズを考えた。市が企画し実施するのではなく、市民がアイデアを考えて、企画し、実施している。

(委員) やるならば世界一を目指そうということで動いた。

(委員) 市をあげて機運を盛り上げて、UBEビエンナーレを世界に広めていこうという有志の集まりで、仕掛けをどうしていくかと真剣に考えた。例えば、お菓子とコラボしてビエンナーレを面白く周知できないか、というテーマで色々なアイデアを出すなど、業者の方も関わりながら大所帯で動いた。

前回のUBEビエンナーレが終わったところで活動が一旦、終わったので、次のUBEビエンナーレにどう繋げるのかということが課題になっている。

(会長) 完全に、民間の集まりですね。活動している団体があるから、それを大事にして、取り組み内容の中に入れたということですね。市と民間が一緒になって情報を発信していき、知名度が上がることは良いことである。

(委員) 私はビエンナーレにダンスに関わったが、子どもたちが彫刻の前で踊ることをきっかけに、彫刻を見る目が変わっていき、彫刻に関心を持っていったのが印象的であった。

(委員) C-4の「ふるさと学習副読本作成事業」の目標が「『宇部の精神』を引き継ぐ人材を育成」と修正されているが、「わたしたちの宇部」と「ふるさと宇部」にどのように反映されているのか。

(事務局) この本は、小学校3・4年生と中学1年生が社会科の副読本として使っているものであり、宇部市の歴史や地域、先人たちの功績等を紹介することによって、『宇部の精神』を伝えていこうとするものである。

(委員) お年寄りの方には、「宇部の精神」という言葉に、宇部モンローというイメージを持っている方がいる。それを、未来に向かってのまちづくりを担う子どもたちに伝えるとは、難しいことを入れたなと思った。

(委員) 先日「わたしたちの宇部」を目にしたが、内容を見て、4年生の子どもには少し難しいと感じた。

(委員) 宇部を知るという意味ではいいと思う。学校ではどの授業で使っているのか。学校に使い方等を提示しているのか。

(委員) 私は現在、学校に石炭のことや宇部の歴史を教えに行っているが、授業のほか、社会見学などの事前学習にも活用している。

(会長) どこが編集しているのか。

(副会長) 教育委員会の先生方が編集している。

(会長) 他になれば、次の議題に入る。その他について、事務局から説明をお願いします。

《事務局から、宇部市文化創造財団についての資料の説明を行った》

(会長) 宇部市文化創造財団が設立し1年経過したが、皆さんにはどう映っているのか、印象を言っていたきたい。

(委員) 私の印象は、資料の「(仮称)宇部市文化創造財団について」に書いてある「使命の7・文化施設の管理運営」は順調で、「使命の4・文化の創造、観賞、参加その他文化に触れる機会の充実」がややできているという印象だが、他の項目は今後努力が必要と感じた。使命の項目が多いので、重点テーマを作って年次的に行った方が良いのではないか。

市民には、「財団ができて、変わった」と、見えるようにしないとイケない。

周南市文化振興財団はテレビで頻繁にCMを流していることもあり、活発に活動しているような印象がある。

宇部市も財団ができたときは、周南市のようなイベントが行われ、変わってくるのか、という期待感があった。設立後、1～2本イベントはやったが、何を目玉にしようとしているのか伝わってこないため、これで大丈夫かなという不安も感じた。

音楽招聘事業を行っている県内の財団の中には、年間多くの事

業に取り組んでいるように見える財団もあるが、実際のところ、年間 50～60 本の事業を行っていても、自主事業は 10 くらいで、あとは委託事業というのがほとんどである。

宇部市では、昭和 40～50 年代のことだが、渡辺翁記念会館で流行の若者向けの音楽をやりたくても、当時の教育委員会が許可しなかった、と聞いている。

このため、業界では、「渡辺翁記念会館を借りるのは難しい」というイメージが定着し、委託事業が宇部市には来なくなった。そのため自分たちで全てをするしかないので、財団のリスクが高くなっていると思う。

先日の石井啓一郎さんの演奏会のように、財団主導で市民と一緒に作りあげていく進め方が、財団の認知度も上がるから良いと思う。

(委員) 私は音楽の祭日に関わったが、財団は、渡辺翁記念会館を使うことに固執していないだろうか。文化を発信していくのは渡辺翁記念会館からでも良いが、いろいろな事情で渡辺翁記念会館に来られない方もいるので、もっと柔軟に対応し、財団が出向いていく、動く財団、というスタンスがあっても良いと思う。

渡辺翁記念会館や文化会館はアクセスが良くない。下関市の「ふくふくこども館」のように、人が集まってくれば周知も簡単。いかに人の集まるエリアを作れるかもこれからの課題だと思う。

若者・若い世代はスマホから情報を得たり発信を行い、今やスマホは無くてはならないものとなっている。そのような若者は文化をどうとらえているのか。ターゲットや年代にあった企画をする必要があるのではないか。

また、ジャンルがクラシックに偏っている印象を受けているので、歌謡曲や、パガニーニの曲のアレンジであったり、従来の観念やジャンルにとらわれない企画もあって良い。

いずれにせよ、チケットの販売に苦慮しているようでは、今後状況は厳しくなっていくと思うので、チケットの売上げを上げていくことが課題と思う。

(委員) 渡辺祐策翁生誕 150 周年記念講演会の観客が少なかったと思

う。もう少し早い時点でPR活動をしなといけないと思った。ウィーン少年合唱団のように、有名なものは人が集まるが、オルフェイ・ドレンガーのように、聴いたら素晴らしいのに、どうして人が集まらないのかと思った。

財団も努力はされていると思うが、まだまだ、PRの仕方を考える必要がある。

(会長) 渡辺祐策翁生誕150周年記念講演会のチケットが3回通し券しかなかったのは買いつらかった。

人を集めるのは大変である。大学でシンポジウムなどを行ってもなかなか人が集まらない。無料の場合でも集まらないのだから、お金を出してとなると更に難しい。

(委員) 財団が行っていることを、まだ知らない人が多いと思う。

チラシを子どもが学校からもらって帰ったが、内容が難しく、また、親が子どもを連れていける内容と時間帯ではないと思った。

渡辺翁記念会館について、PTAの行事で利用したが、本当に素晴らしい施設なのに、規制が多く使いつらかった。

財団の活動が、一部の興味のある方にしか、知られていないと思う。改善をしながら、一人でも多くの方に知ってもらいたい。

(委員) 財団の名称について、一般的な「文化振興財団」という名称ではなく、「創造」を使用したことが宇部らしい大事な意味が込められていると思った。

代理店主導でイベントをすると、人が育たず、お買い物商法になってしまう。現在、財団は、予算を決めて、年間を通して事業を行うという仕組みになっている。今の財団は、昨年まで市が行っていた事業を除けば、買い物事業に足を踏み入れており、「創造」からかけ離れていくのではないかと危惧している。

市民は、高い価値のあるものを求める一方で、対価に対しては厳しく、無料であれば参加するという傾向がある。そこで、価値のあるものを無料で開催すれば、イベントの価値ももっと上がると思う。集客できなければ、関わった人が潰れるだけだ。

また、宇部市には組織的に集客する仕組みが昔からあったと思

う。特にクラシックにおいては、戦後からの実績がある。宇部市はクラシックでも人が集まるが、山口市では集まらない。これは宇部の財産だと思う。

歌謡曲やポップスを運営する側の意見として、渡辺翁記念会館は使いにくい。数千人規模を集めないと、人が集まった感じがしないし、採算も合わない。著作権をはじめとする費用などの問題もある。

渡辺翁記念会館は、価値はあるが、使う側からすると使いにくい。会館を運営する財団も、ここに固執すると事業の自由度が広がりにくいのではないかと思う。

宇部市には、アートパフォーマーバンクや宇部文化連盟もあるが、登録者や団体を把握し、連携し、情報交換するか、あるいはそういう場があるかどうか、それが、若い人たちに引き継がれているかどうかで、財団の5～10年後が変わっていくと思う。

若い人がクラシックを知る機会は、学校の授業くらいしかないが、アーティストと直接交流する機会があると影響が大きい。日フィルのコンサートでも、学校の子どもたち対象にゲネプロを見せているが、そういった活動が大事である。今年の財団の事業には、そういう活動は無かったように思う。

若い人は、テレビより、インターネットやライン、SNSで情報を共有して発信するようになっているので、若い人向けの情報発信の工夫も必要と思う。

今のような仕事のやり方では、財団のスタッフにも限界があるので、やっつけ仕事になってしまい、人材育成がうまくいかないのではないか。

私の経験から、チャンスがあれば若い人も伸びてくると思う。

(委員) 市民サポーターとして、財団の裏方のお手伝いをしている。職員の方はすごく頑張っているが、人手が足りなさそうで、本当に大変だと思っている。

記念会館は素晴らしいが、駐車場が狭い。

高齢になると夜のコンサートは行きたくない。駐車場がいっぱいで、他に停めて歩いていくようになったら、と思うと足踏みしてしまう。イベントの開催時間を、対象を考えて、考慮できない

かと思う。

市のビジョンが大きすぎて、足踏みしているのではないか。財団に寄せる市民の期待が大きすぎて、職員は堅くなっているように感じる。財団には、肩の力を抜いて仕事をしたらと言いたい。

私の周りでは「音楽の祭日が良かった」という意見を聞いた。

また、市民参加型の劇を観賞したが、市民が参加すると宣伝にもなるので、このような仕掛けは良いと思った。

個人的にはハーモニカの演奏会がとても良かったので、箏曲コンクールのように宇部に引っ張ってこれたらいいのと思った。

宣伝については、テレビCMが効果があると思う。

皆の知恵を絞って考えていけばいいと思う。

(会長) 記念会館だけを使うのが財団の仕事ではない。もっと外に出て行ってもいい。

規制が厳しいという意見があったが、財団になってどの程度改善されるのか。

友の会の会員を対象に、自由に意見を言う場を設けたら良いと思う。様々な意見を選択する場があり、イベントへの意見が言えたりすると良い。

若い人を採用されているが、その方たちはどう思っているのだろうか。職員の人数は、今何人か。

(事務局) 財団で採用した職員が3人、市から出向している職員が4人、舞台の技術職員が6人、臨時職員が4人。

(委員) 先ほど会長から提案のあった、職員各人の仕事に対する意識について、自分も聞いてみたい。もっと職員の能力を引き出すことができる、財団ももっと良くなるのではないかと思う。

(委員) 職員は忙しいように見える。先日も宇部新川駅でチケットを売っていた。

(委員) それは、財団職員が財団のする仕事をまだわかっていないから、とりあえずチケットを売れば、職員としての役割を果たしている

気になるという感じの仕事になっているのではないかと思います。

夏頃、あるバンドを山口で招聘しないかという話を持ちかけられた。自分の所属する団体では、話が盛り上がらなかったが、財団と一緒にやることができないかと思い、話を財団に提案した。

(委員) 音楽の中には、設備の問題でできないこともあると聞いた。

(委員) 演歌でも何でも、やるだけなら公演はできる。しかし、記念館は間口も会場も狭く、料金的に採算が合わないので公演ができない。もっと多くの人が入るホールですら、昼・夜の興行をして、やっとペイできるのが現実である。

また、宇部市では興行が来ないから、一から企画を立ち上げていかないといけないという問題もある。

しかしながら、財団職員の方は、厳しい面接を通過して入った方だから、まだまだ能力を出せるのではないかと思います。

(事務局) 財団職員には様々なキャリアを持った方がおり、また、今は市から職員も出向しており、ちょうど過渡期と考えている。

このような状況の中で、興業的なイベントと、廉価で皆で楽しむイベントと、イベントごとに意識・意味も変えながら開催していく必要も感じている。

個人的には、文化は、関わる職員が楽しまないといいものがないと考えている。

設立から駆け足できて、ちょうど1年経ったところなので、審議会の委員の皆さまの意見を聞いて良かったと思う。

今後、職員の採用を行い、体制をより強固にして、民間からの採用も行い、若い人の意見を尊重できるように調整していきたい。

皆さんからも、その時々具体的な気づきや感じたことを私ども事務局にも是非教えて欲しい。すぐできることもあれば、中長期的な問題等もあると思うが、行政職員だけでは気づかないところもあるのでよろしくお願いいたします。

(会長) 財団職員の方がどう思い、どういう姿勢で仕事をしているのか、一人ひとりが考えていることまでは見えず、自分たちは想像する



ことしかできない。

例えば、取材に行ったことのある金沢の21世紀美術館では、若い職員に企画を任せていた。任されるから仕事はきついけど、若い学芸員が元気だった。

財団職員と一度話をして、宇部市にはこんな大きなビジョンや目標があるけど、どうですか、と聞いてみたいし、採用された若い職員の方が、生きがいをもって仕事をしているのか知りたい。大げさにいうと、市民が職員を育てていかないといけないが、今は接触する機会がほとんどないので、聞く機会が欲しい。

(事務局) 今後調整させて欲しい。

(会長) 今年度中に機会を持って、このメンバーで聞いてみるというのはどうでしょうか、皆さん。

(委員) その通りだと思う。お互いの情報を出しあう場があり、例えば、採用されるのはわずかでも、アイデアはたくさんあって良い。  
先日、あるピアニストが、宇部なら関係があるので演奏しても良いという話をいただいたので、財団に企画を持っていったが、今の財団には、突然くるチャンスを生かす体制になかった。

(事務局) チャンスは突然訪れるというのも分かるが、予算等の制約もある。公共性の高い事業と、実験的に職員が創意工夫で自由に動ける部分を作るという方法もあり、今は模索しているところである。

(委員) 言われることは理解出来るが、できない理由を並べる財団ではなく、できるためにどうすればいいかを考える財団であって欲しい。今は考えるというテーブルにも乗せてもらえない状態。市民の立場からすれば、どこで会議がされて決まるのか、また、誰に意見を言えばいいのかわからないという状態だ。

(事務局) 事業計画は財団の中での話。年間で、できることに限りがある段階で、今は手探りの状態であろう。

(委員) 手探りの中であっても、成功体験をしてほしい。この場合の成功体験とは、1人でも多くの方に来てもらうということだと思う。事業をやったときに採算がとれるのが本来の姿だろうが、予算ありきで進む事業よりも、まずは集客だと思う。そこを考えると、チケット販売の仕組みについては急いだ方がいいと思う。

(会長) 私も委員のひとりとして、財団スタッフの方がどういう風に思っているのか忌憚なく言える場があると良いと思う。

財団の職員は、希望をもって財団に入った方たちなので、育っていないといけないと思う。

また、財団だけに様々な事業を押しつけるのも良くないと思う。全部決められたことをやらせておいて、集客だけは財団でなんとか工夫しろというのは、個人的にはそこまでさせなくても良いのではないかと思う。

2年前に「財団の使命」を考えた際は、他市を参考にして、どこの市でも項目立てしているような平均的なものになっている。そのため、財団の「使命」について、我々も参加し、意見を交わし、深めていく必要があると思う。

中でも大事なことは、多くの方が参加することと、子どもたちが育っていくこととは思う。

《事務局から、次回の開催予定について説明した》